

とりまとめに当たっての基本的な考え方と活用上の留意点

環境保全型農業技術の目指すべき方向と目標

◆販売単価への転化より、単収向上、省力化、コスト低減による経営向上が目標

農産物生産において「安全・安心」は当たり前の世界であり、「安全・安心」な農産物を前面に出して高単価販売を目指す流通戦略は経済動向と密接に関係し、不確定要素が多く、必ずしも経営の安定につながるとは言い難い。

むしろ再生産価格を明確に設定した中で、収量向上と省力化技術、資材循環技術等を駆使したコスト低減技術の確立が目指すべき目標である。

◆環境負荷低減は、事業者としての社会的責任と国民的コンセンサスの獲得

エコ活動は、低炭素社会実現に向けた取り組みをはじめ、ゴミの分別収集から家電リサイクルに至るまで様々な取り組みが実施され、もはや全国的、世界的な動き、常識として展開をはじめている。そうした中で農業にあっても、食の「安全、安心」を謳うことはもとより、環境に負荷を与えない取り組みを実践することを誇り、ステータスとしていくことを究極の目標としたい。

以上の目標と理念を基に、全国のモデルとなる干拓営農を目指すのが、今回は前者の「安全・安心」な農産物生産を担保する技術体系について整理した。

元来、気象条件などによって大きく影響される農業にあっても、目指している環境保全型農業は、極めて変動が大きい技術である。その意味で今回提示した技術体系は必ずしも確定技術、栽培マニュアルではなく、モデル体系として提示した。

活用可能な個々の技術についても前段で掲載したので、それぞれの技術内容を十分に理解し、臨機応変にアレンジしながら、それぞれの営農形態に沿った技術として組み立てて頂くことを願います。

モデル体系の前提

①基本作型

慣行栽培で実施されている標準的な作型を設定した。

極端な前進化栽培や不適環境下での栽培は、病害虫の発生を助長する。標準的な作型で想定される土壌環境や気象条件での施肥設計や病害虫防除対策技術について整理した。

②有機質肥料代替施肥

代替有機質肥料は、肥料取締法による保証成分が明確なもので入手が容易であること、これまでの実証試験例などを参考に、ナタネ油かすを中心とした施肥設計とした。

各種有機質資材について、その分解特性や肥効率を整理したので、それを参考としながらそれぞれの経営体で使用する有機質肥料での設計を願いたい。

また、本誌に記載のない特殊な有機質肥料、有機物の使用については、干拓営農研究部門において個々の分析や設計で協力するので、ご相談いただきたい。

③土壌消毒対策

薬剤による土壌消毒は原則実施しない方針とした。

④除草対策

除草剤の使用については、極力使用を避け耕種的除草対策による体系として整理した。